イーハトーブの幽霊

内田康夫

イーハトーブの幽霊

内田康夫

中央公論社

イーハトーブの幽霊

一九九五年六月三〇日　初版印刷
一九九五年七月一〇日　初版発行

著　者　内田康夫
発行者　嶋中行雄
印刷所　三晃印刷
製本所　小泉製本
発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋二-八-七
振替　〇〇一二〇-四-三四

©1995 検印廃止
Printed in Japan

ISBN4-12-002456-3

イーハトーブの幽霊　目次

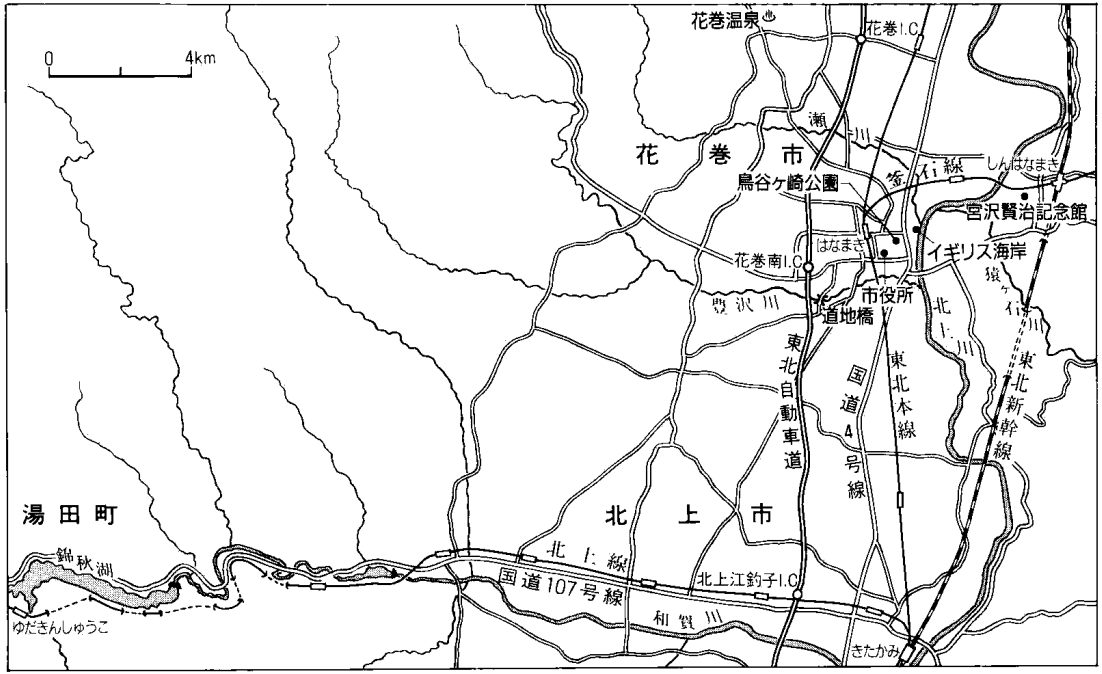
プロローグ　5
第一章　イギリス海岸にて　16
第二章　花巻祭りの夜　63
第三章　毒もみの好きな局長さん　102
第四章　復讐する少女　143
第五章　銀河鉄道の惨劇　187
第六章　美しき修羅　231
エピローグ　282

装画　塩谷博明

装幀　安彦勝博

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

イーハトーブの幽霊


0
4km
花巻温泉
花巻I.C.
瀬ヶ川
花巻市
鳥谷ヶ崎公園
釜石線
しんはなまき
宮沢賢治記念館
はなまき
イギリス海岸
花巻南I.C.
市役所
豊沢川
道地橋
北上川
猿ヶ石川
東北自動車道
国道4号線
東北本線
東北新幹線
湯田町
北上市
錦秋湖
北上線
国道107号線
北上江釣子I.C.
和賀川
ゆださんしゅうこ
きたかみ

プロローグ

午後九時近くまで、〔ベイシー〕の客はその男一人だった。四十代なかばぐらいだろうか。どちらかというと小柄で、顔も体型も贅肉を削ぎ落とした、少し貧相に見えるほどの細身だ。黒いサマージャケット。ノーネクタイで、ダークグリーンのワイシャツに、チャコールグレーのズボン。いかにも古いジャズが好きそうな雰囲気の持ち主だ。

笠野はビールの大ビンとグラス、それにつまみのピーナッツをテーブルに置くと、あとは勝手にやってくれとばかりに、自分のテーブルに戻って、書きかけの原稿用紙に向かった。もっとも、いくら商売に不熱心とはいえ、店に客が来ているときはそれなりに気にかかる。万年筆を手にしたが、文章の先が浮かばないので、諦めて煙草に火をつけた。

スピーカーからは店の名前の由来でもあるカウント・ベイシーの「ローズランド・シャッフル」が流れている。客の男は曲に合わせるように、目をつぶり、唇を半開きにして、首を左右に

スイングさせている。

見かけたことのない男であった。〔ベイシー〕の客は常連か一見（いちげん）の客かのどちらかである。一度で懲りて来なくなるか、でなければ麻薬に取りつかれたように、しげしげとやって来るか。この店の魅力――というより、ジャズってやつは、もともとそういうものかもしれない。この客はどっぷりジャズに浸かったような顔をしている。それでいて馴染みでないとなると、地元の人間ではなさそうだ。〔ベイシー〕には時折、とんでもない遠いところからの客が訪れる。常連と一緒のこともあるし、噂を聞いて、旅の途中、フラッと寄ってみたというのもあるらしい。そういう人種なのだろうか。

男が口をきいたのは、店に入って、しばらく値踏みするように、あたりの様子を眺めまわしてから、隅のほうのテーブルを選んで座り、「ビール」と言ったときだけだ。この店同様、無愛想な客である。

笠野も客の世話を焼くのは苦手だし、原稿書きを頼まれているときなど、客が来なければいいとさえ思う。かといって店を閉めるのは信義にもとるような気がするから、夕方になると、なんとなく店にやって来て、ドアに「ＯＰＥＮ」の札を掛ける。しかし客は来ないほうがいい。ガランとした薄暗がりの中、カウント・ベイシーを聴き、原稿用紙に向かいながら、グラスを傾けるのが、笠野の至福の時であった。

原稿といっても、ジャズの専門誌とか、物好きな雑誌から頼まれる短いエッセイ程度だが、お

世辞半分にしても、笠野の書くものは評判がいいのだそうだ。笠野自身、書くことが嫌いではなかった。

十年前に東京を引き上げるまでは、笠野は広告会社でコピーライターをやっていた。そこそこの給料を貰い、仕事を通じてけっこうタレントなんかとの付き合いもあって、面白おかしくやっているぶんにはよかったが、所詮は長くつづけられる職業ではなかった。三十代のなかばを越えるころから、自分でもそれと分かるほどコピーに冴えが無くなった。発想自体、きらめきを失った。

創造のメカニズムというのは、あれはどういう仕組みになっているのだろう。かつては、クライアントからテーマを与えられた瞬間、頭の中でパッと閃くようにアイデアが浮かんだのが、ある時、その自慢の思考力がまったく機能しなかった。まるで曇ったガラスのように何も見えてこないのだ。昨夜の飲み過ぎのせいかと思ったが、それから数日間、そういう状態がつづいた。その仕事に関してはなんとか恰好をつけて、プレゼンテーションを通したが、クライアントの担当者は不満そうだった。

その直後、ずっと後輩のクリエーターの卵のようなやつに書かせたコピーを見て、ショックを受けた。まだかなり粗削りだが、自分の中のどこを探しても見つかりそうにない「口調」がキラッと光っていた。

笠野はズキンと胸が痛んだ。一応、「こんなんじゃ、世間さまには通用しねえよ」と貶したが、

その時代遅れの「世間さま」に自分がなりつつあるのを感じた。

技術や能力はある程度、蓄積できるが、感覚や感性にはトレーニングではどうにもならない部分がある。生まれ育った環境や時代のせいばかりでなく、天性の何かがはたらくのだろう。その天性備わったものが、時代の流れに追い越される瞬間が、誰にも必ず訪れるものかもしれない。

昔の作家たち——とくに若くして文壇に名を馳せた、天才といわれるような人々——正岡子規、尾崎紅葉、国木田独歩、長塚節、芥川龍之介、宮沢賢治、太宰治などは、いずれも三十代で死んでいる。病死もあるが自殺の多いことに驚かされる。死の原因や動機に、才能の枯渇や行き詰まりに対する恐怖と自己嫌悪のようなものがあったのではないか——たとえかたちは病死であっても、彼が生の意義を失った時点で、天も見放したにちがいない——などと、笠野はずっと前から思っていた。

自分にもその「季節」がやってきたことを、笠野は悟った。

（おれも彼らと同じ歳だ——）

そう思ったときから、笠野は仕事に張りを失った。それでも二、三年は惰性のように、その場凌ぎでお茶を濁してきた。好きなジャズを聴かせる店で、なかば酒びたりのような日々を送ったりしてみた。女に溺れる真似をしてみようと試みもした。笠野は結婚も早かったが離婚も早かった。女の言いなりに、くっつき、離れたようなものだった。それ以来独り身を通している。何をしようと文句を言う人間はいない。自堕落な生活から、何か新しい才能が掘り起こせるかもしれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ない――という期待もあった。

事実、酔いの中ですばらしいフレーズを思いついたこともある。バーの女を相手に「おれは天才だろう」などと、押しつけがましく言った。しかし、翌朝になって、二日酔いの頭で思い出したフレーズは、いかにも陳腐で使い古したものであることに気づいた。

四十を前にして、管理職の内示が出されたとき、笠野は会社を辞めた。辞表を出すと、人事部長が驚いて飛んできて、「どうしたんだ？　気に入らないことでもあるのか？」と訊いた。理由を訊かれても、答えようがなかった。差し当たり仕事内容が変化するわけではなく、とりあえず役職名がつき、給料もアップするだけのことなのだ。会社側にしてみれば、それで何が不足か――という気持ちがあっただろう。

「どこか、引き抜きか？」とも言われた。ヘッドハンティングかと疑ったらしい。

「いや、田舎に帰って、べつの商売でもやろうかと思ってます」

ほんの思いつきで、そう言った。

「田舎って、岩手県か」

「ええ、一関（いちのせき）です」

言いながら、ふいに一関の風景が脳裏に蘇った。とたんに、矢も楯もたまらなく、郷里に帰りたくなった。あれほど嫌って出てきた田舎臭い街や、蛇行してむやみに洪水ばかり起こす北上川や、頭が丸く、特徴に乏しい山々が懐かしくなった。

「帰りなんいざ、か……」
人事部長は心底、羨ましそうに「いいよなあ、帰る田舎のある者は」と言って、辞表をポケットに仕舞った。
人事部長に「べつの商売」と言った時点で、笠野にはひとつのイメージがあった。実家が持て余している蔵を改造して、スナックかパブをやろうと思った。本物のジャズばかりを聴かせる店で、気の合う客だけが来ればいいような、呑気な経営方針でいこう——と思った。
一関に帰ると、その夢はすぐに実行に移された。蔵は粗末だが、頑丈なのが取り柄だ。煉瓦むき出しの壁も、らしくていい。音響システムは自宅で使っていたものでほぼ間に合った。レコードもこれまでに蒐集したのがおよそ三千枚ほどある。CDはいかにも光学的な音で嫌いだ。
退職金をはたいて、ピアノとドラムセットも入れた。アーチストを招いて、ミニコンサートもひらける。こうして、典型的な田舎町・岩手県一関市に本格的なジャズ喫茶の店が生まれた。
そして、客は入らなかった。
開店当初は、高校時代の仲間が何人か、お義理でやって来てくれたが、たいていは一度で懲りた。
「ジャズばっかしっていうのはどうもなあ。せめて、アリスとかよ、ユーミンとかよ、そういうのならいいんでねえか」
欠伸を噛み殺すような顔で言った。

「もう、おまえら、来るな」

笠野はアヒルでも追い立てるように、彼らを店から締め出した。カラオケ屋と勘違いしているような、ジャズの分からない連中は来なくてもいいと決めた。決めたのはいいが、その希望どおり、誰も来なくなった。

一関の人口は約六万。そのうちの何人がジャズファンか、何人が物好きに、あやしげな店に来てくれるものか——ちょっと考えれば悲観的にならざるをえない。広告会社に長いこと勤めていたくせに、マーケティング理論をまったく無視していたのだから、われながら笑えてしまう。さいわい、建物だけは自前なのと、従業員を使っていないので、経費がほとんどかからないことが救いであった。

しかし、そんな店にもポツリポツリと客はあるものだ。前述したようなマニアックなジャズファンが、月に一、二度から週に二度三度と足しげく通うようになった。地元新聞が面白がってコラムにも載せた。いまどき、こんな風変わりな店は日本中どこを探したってないのだから、話題性はたしかにある。近くに公演に来たアーチストが、噂を聞いてブラッと立ち寄り、興に乗ってピアノを叩いてくれたりもした。東京時代に知り合った、Mというけっこう売れっ子の小説家が、すっかり気に入って、仲間を連れて来ることもあった。あげくのはて、市の観光案内のパンフレットでも「一流ジャズプレーヤーの生演奏が聴ける店」と紹介されるほどの名所に昇格した。

といっても、お客の絶対量は限られたものである。相変わらず閑古鳥(かんこどり)の鳴いている日が多く、

笠野の「至福の時」は有り余るほど長い。

*

原稿書きに熱中していて、レコードが終わったのにしばらく気がつかなかった。
「音がないと、寂しいね」
客がふいに言った。いくぶん皮肉が込められた口調だ。
「あ、いけね、すんません」
笠野はいたずらを見つかった子どものように、慌てて立ち上がった。ホレス・シルバーのアルバムをターンテーブルに載せてテーブルに戻ると、客の男が佇(たたず)んで、原稿を覗き込んでいた。
「困るなあ、勝手に見てもらっちゃ」
笠野は文句を言ったが、客は平然として動こうとしない。
「物書きもするんかね」
「いや、くだらない雑文ですよ」
「そんなことはない、面白そうだ」
途中の一枚だけ読んで、面白そうもないだろう——と笠野は思った。
「お客さんもこれですか」
ペンを持つ手の恰好をしてみせた。

「ああ、いや……」
客はどっちつかずの返事をして、気まずそうに顔をそむけ、テーブルに戻った。
それからしばらく、レコードの音と笠野が吸う煙草の煙だけが薄暗い店内に充満した。客はビールのお代わりをするでもなく、煙草を吸うでもなく、腕組みをしてジャズに聴き入っている様子だ。
（どこの者かな？――）
客の個人的なことにはあまり関心を抱かない主義の笠野だが、男の素性が気になった。ほんの二言三言、交わしただけだが、言葉つきからいうと、やはり地元の人間ではなさそうだ。さりとて、かすかな訛りもあって、純粋な東京弁とは違うような印象を受けた。荷物を持っていないところを見ると、通りすがりの旅行者ではないらしい。どこかに宿を取って、散策している途中、たまたまここに寄ったのかもしれない。
レコードが終わったのを汐に、笠野は声をかけてみた。
「何かリクエストはありますか」
「できたら、マイルス・デイビスをやってもらいたいな」
言われたとおり、マイルス・デイビスの古いアルバムをかけて、そのついでのように客のテーブルに行って、ビールの空きビンを撤去しようと思ったら、まだ中身が半分近く入っていた。
「あまり飲まないんですね」

グラスに注ぎたしてやりながら言った。
「ああ、今夜はね」
「今夜は……というと、ふだんは飲むんですか」
「まあね」
「だったらビールでなく、コーヒーでも出しましょうか？」
「ふーん、コーヒーもあるのか」
「そりゃ、一応、ジャズ喫茶ですからね。コーヒー、飲みますか？」
「いや、これでいい」
客はグラスを目の上まで捧げてから、お義理のように、ゴクリと喉を鳴らしてひと口だけ飲んで、「ジャズが聴きたかっただけだ」と言った。
「だいぶ好きそうですね」
「ああ、古いのがね」
「ここのひとじゃないでしょう。どちらから見えたんですか？」
「東京……かな」
「ははは、『かな』は変だな。どこなんです？」
「いいじゃないか、どこでも」
客はうるさそうに首を振り、「注文の多い喫茶店だな」とニヤリと笑った。むろん、宮沢賢治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com